

記念誌「相中相高八十年」より
(創立期 その11)

作文にみる生徒の意識

「学友会雑誌」には、数多くの生徒の文章が掲載されている。その一部によって、明治期の生徒意識の一端をさぐってみよう。日露戦争後の日本についての認識等が、表現されている。

吾帝国は……支那帝国の無礼を戒め、其頑僻を諭せり。今や懸軍万里露西亜帝国の暴抗を膺懲し東洋の平和を復し、将にその健翼を張り広大なる世界万国の間を縦横……。

是れ豈に千古未曾有の一大快事にあらずや。而して日本は益々此驥足を発展し、支那朝鮮を永遠に保護すべく東洋諸国文明の指導者を以て自ら任じざるべからず。

(1906年、創刊号、第4回生 佐藤留太郎)

国家の為め一身を犠牲として花々しく黄泉へと旅立ち、……柱とも杖とも頼だ一人の息子を奪い去られて、老の袂に昨日も今日も村時雨、行末淋しい彼の君のお母さんこそ可哀相なものだ。或夕暮、僕は一寸ものの帰りに立ち寄たら、「明日は伝達式とかだが、袴などとはかなくてならないんだべか」と言ふ。僕は、「ああ、はいて行った方がよからうな」と言ふたら、暫く考えて居た老人が、「ああ馬鹿馬鹿しい。勲章だって飾る胸が有てこそ光もあらう、おら家では長持のこやしになるばかりだ」とさも無念そうに言った時には、はや双方の眼には白露が三つ二つ……。

(1907年、第2号、第8回生 大槻吉貞)

試みに問はん。鋏を手にして終生渝らざるものは禽獣に墮落するものなりや。現今の人徒らに車夫を以て牛馬に比す。彼れ天職を尽さざる者なりや。一毛の薄利に汲々たる小商人、かの骨をも身をも惜まざる労働家、かの工夫、かの職人、日夜泥水に浴するかの農夫、これ社会構成の一大要素ならざらんや。而して、独り颯爽たる有髭の男児のみ社会構成の要素と言はれざるか。

(1908年、第3号、第6回生 “天空小舟”)

聞かずや、彼の世俗一般に流行する俚謡を、盛に学生の墮落を歌ふにあらずや。見よ彼の新聞、雑誌を、見るに忍びざる学生の醜聞を記載するにあらずや。……今日の書生風なるものにおいて、身には長羽織を着し、掌中余りある杖を携へ、シーガーを嚼み、得々然として大道を闊歩する者あるにあらずや。

(1909年、第4号、第8回生 蛭原源助)

▽直ぐ眼の下の山間に薄黄のしっとりとした、霧かとおもはれる気体が凝滞していたが、あれが足尾銅山の亜硫酸瓦斯だときいた時は、誰も不快の念を抱いた。

▽坑内に行った。即ちこれが地獄への入口なのだ。▽事実、足尾の人の顔色は皆蒼白い。

▽世の中にこれほど惨酷な職業が又とあるだらうか。やがては彼等も青草一つ生えて居ない形ばかりの墓地へ行く身だ。…哀れなるものよ。……身をいけにえにして、毎日一万円の血ある涙ある黄金を主古川家に提供して居るのだ。そして末はかの目の前の禿げ山へ。無惨ではないか……この山で一日平均一人の死亡者があるという。

(1911年、第9号、修学旅行記)